

「人々が幸せに生きることができる社会を実現するには～大阪ガスの取り組みをヒントに考える～」 取材先：大阪ガス株式会社



2024年2月22日、2023年度WE DO KYOTO!ユースサポーター5名が大阪ガス株式会社に伺い、同社の環境の取組について取材してきました。今回は、2023年度WE DO KYOTO!ユースサポーターの小島さん、齋藤さん、高さんに、取材の報告として記事を書いていただきました。

(以下、寄稿者：2023年度WE DO KYOTO!ユースサポーター 小島(主)、齋藤、高)

●大阪ガス取材しました！

ユースサポーターが、2024年2月22日に大阪市にある、大阪ガス「エネルギー技術研究所」取材させていただきました！



写真1：大阪ガスの歴史の説明を聞いている様子

●大阪ガスの取り組んでいる課題

大阪ガスは、カーボンニュートラルを実現するための取り組みを行っている。国連が、気候変動の上昇1.5度安定化を達成するためには、2030年までに温室効果ガスを2019年に比べて43%削減する必要があると示している。[1] それを踏まえ、大阪ガス含むDaigasグループは、気候変動上昇1.5度安定化実現のために、「カーボンニュートラルビジョン」を公表し、2030年までにエネルギーの低・脱炭素化へ移行し、2050年までに技術革新によってカーボンニュートラル[2]を実現することを宣言した。



写真2：大阪ガスの事業の説明と質疑応答の様子

●大阪ガスの開発している技術

大阪ガスは、カーボンニュートラル実現のための計画である「カーボンニュートラルビジョン」に沿って、必要な技術開発を行っている。特に、都市ガス、水素・アンモニア、電気の3つのエネルギーをつくる技術と、その3つのエネルギーをうまく使う技術の研究開発に集中的に取り組んでいる。詳しい詳細を知りたい方は、大阪ガスのグループ Daigas グループのホームページ(<https://www.daigasgroup.com/rd/>)をご覧ください。

●大阪ガスの課題解決への姿勢

カーボンニュートラルの実現を目指すことは地球規模の課題であり、大阪ガスという会社単独で取り組んで解決できる問題ではなく、対外的に協力を求めて取り組むべき問題である。そのため、例えば、大阪ガスがメタネーション[3]の技術開発に困ったときには、その必要な技術を提供できる可能性のある企業、大学、行政等と連携し、彼らとメタネーション技術を共同研究・開発することで、カーボンニュートラルの実現という大きな課題の解決に向かって日々取り組んでいる。

●私たち個人にできること

私は、環境問題へ意識を向けること自体がそもそも難しいことだと感じる。ユースサポーターをしている私自身、明日自分が生きていくことに必死で、環境問題を考える余裕がないことも多い。そして、環境問題以外にも私たちの暮らす日本では、解決しなければならない社会問題が多く存在する。私は、どのように解決していけばよいのかも分からず、途方に暮れ、出口が見えない暗い世界にいるような気がし、閉塞感を感じる。私は、環境問題に関心のある大人が少なくとも致し方ないように感じる。

そこで、カーボンニュートラル実現という大きな課題解決に向けて懸命に取り組む大阪ガスの姿勢が参考になるのではないだろうか。大阪ガスは、自社だけで全てを対応するのではなく、必要とする情報を積極的に開示し、外部と連携することで、少しずつ仲間を増やしながら、大きな課題解決に取り組んでいる。大阪ガスの取り組む姿勢が、社会に山積する問題の解決に取り組む際のヒントになるのではないかと感じる。

人は、家族、友人、パートナー、会社、団体、サークルなど様々な社会的コミュニティを形成して生活している。そのようにして私たちは日々暮らす中で、わずかに違和感を感じることがあるだろう。例えば、「なんかつらいな、傷ついたな」という思いは、多くの人が

経験したことがあるのではないだろうか。自分一人ですることが限られていることを自覚し、そうした違和感を感じたときは、一人で抱え込むのではなく、その自分の違和感をきちんと言語化し、否定せずに受け止めてくれる、周囲にいる信頼できる人に伝えることが、大切ではないだろうか。そして、自分を受け止めてくれる仲間と、その違和感をどうすれば解消できるのかを一緒に考える。そのようにして、その違和感がどこに由来するのかを丁寧に遡っていくと、最終的に社会の構造的な問題にぶつかるのではないか。私は、自分の違和感を大切にすることが、社会問題の解決の契機となるのではないかと考えている。

当然、社会で取り組まなければいけない課題は、カーボンニュートラルの実現だけではない。しかし、カーボンニュートラルの実現に真摯に取り組む大阪ガスの姿勢は、多くの社会問題の解決に通ずるものがあるのではないかと感じた。私たち一人一人の個人が意識的に行えることは、自分自身という一人の人間で実行できることの小ささを自覚し、周囲の信頼できる仲間にも助けてもらうことではないのだろうか。私は、社会の構成員である一人一人が自分自身の違和感を大切にすることが、最終的に環境問題を含めた社会全体の問題の包括的な解決につながり、人々が幸せに生きる持続可能な社会を実現できると考えている。

取材に応じてくださった大阪ガス様、本当にありがとうございました！

[1] “New Analysis of National Climate Plans: Insufficient Progress Made, COP28 Must Set Stage for Immediate Action” United Nations (2023)

<https://unfccc.int/news/new-analysis-of-national-climate-plans-insufficient-progress-made-cop28-must-set-stage-for-immediate>

[2] 大気中へ排出する実質の炭素排出量をゼロにすることをさし、地球温暖化の影響を軽減する取り組みの一つ。

[3] 再生可能エネルギーから作り出した水素と二酸化炭素からメタンを合成する技術であり、大阪ガスがカーボンニュートラルを実現するために開発している技術の一つ。

取材日：2024年2月22日

寄稿者：2023年度 WE DO KYOTO!ユースサポーター 小島（主）、齋藤、高

「手に取るものは環境にやさしいものに」

取材先：株式会社セブン-イレブン・ジャパン



2024年2月5日、2023年度WE DO KYOTO!ユースサポーター4名が株式会社セブン-イレブン・ジャパンに伺い、同社の環境の取組について取材してきました。今回は、2023年度WE DO KYOTO!ユースサポーターの平田さんに、取材の報告として記事を書いていただきました。

(以下、寄稿者：2023年度WE DO KYOTO!ユースサポーター 平田)

ユースサポーターの4名でセブン-イレブン京都東洞院錦店を訪問し、お話を伺ってきました。多くの人を利用するコンビニにはたくさんの「環境配慮」がありました！

●環境問題に対する取り組み：「GREEN CHALLENGE 2050」

株式会社セブン-イレブン・ジャパン様は「GREEN CHALLENGE 2050」で宣言されているように、環境問題に対して①「CO2 排出量削減」②「プラスチック対策」③「食品ロス・食品リサイクル対策」④「持続可能な調達」の4つの目標を掲げています。

この中から取材を通して②「プラスチック対策」③「食品ロス・食品リサイクル対策」を重点的に紹介します。

●「プラスチック対策」

まず、近年、世界的に課題となっているプラスチックに対する取り組みですが、セブン-イレブン様は以下のようなものを実施されています。

一つ目に、商品の包装と容器には環境に配慮したものを使用することです。例えば、サラダのカップの一部には環境配慮型のPET容器にしていたり、サンドイッチフィルムの一部に紙が使われていたり、商品の品質と環境面を同時に考えた工夫がされていました。また、チルド弁当などに使われている容器は全てインクを抜いた白になっています。これは、インク使用による環境負荷が大きいことから、無色にすることで少しでも環境への影響を小さくしているそうです。さらに、サラダの蓋には、従来の上から被せるタイプのものではなく、薄いシールをめくるトップシール包装が導入されています。この導入により、プラスチック使用量の削減だけでなく、容器の空間内に窒素を充填することができるため商品の鮮度向上に役立ち、食品ロスの削減にもつながっているとお聞きしました。



写真右側：白色で形を統一した容器

インク的环境負荷の低減+配送時の CO2 削減と効率を向上

写真左側上段：サラダにトップシール包装を活用

二つ目は、「ボトル to ボトル」の取り組みで、これは私たち消費者が主体的に行う環境配慮行動でもあります。使用済みのペットボトルを店舗前に設置されているペットボトル回収機に入れると、それらがリサイクル加工を経てまたペットボトルとして商品になる流れが作られています。ペットボトルを衣服にリサイクルすることはよく見られますが、そうではなくその後の環境への負担を減らすためにペットボトルとして再利用することに重要性を見出されていました。私はこの機械を見たことがなかったのですが、全国に 3,000 台以上設置されているようです。2020 年から全国でレジ袋の有料化が始まりましたが、実はそのレジ袋代がペットボトル回収機の購入費用に充てられており、リサイクルを広げようとする積極的な姿勢を窺うことができました。



ラベル下部に「100%再生 PET 樹脂使用ボトル」と書かれています

●「食品ロス・食品リサイクル対策」

セブーンイブソン様は食品ロス・リサイクルに関して、食品廃棄物量を 2050 年に 75%削減することを目標に掲げています。その達成のための取り組みとして、一つ目に「エシカルプロジェクト」があります。これは消費期限の近づいた商品に緑のシールを貼り、それを電子マネーnanacoで購入すれば nanaco ポイントを 5%獲得できるそうです。このように、環境配慮とお得さを合わせた工夫が見られました。この他にも、規格外の野菜や、通常は、使

用されない（廃棄となる）部分（ブロッコリーの芯など）を使用するスムージー仕器も店舗内に導入されています。また、地元の野菜を消費する地産地消にも力を入れているそうです。例えば、コロナ禍中に余剰となっていた丹波大納言小豆をシュークリームとして手軽に楽しめる商品にすることで、食品ロスの削減に取り組まれています。

※『食品ロス削減を目的とした取り組みのひとつである「エシカルプロジェクト」は2024年8月末をもって終了となります。今後もセブン・イレブンは、値下げ販売を通じた施策である「エコだ値」や、すぐに食べる商品は商品棚の手前から選ぶ「てまえどり」などによって、継続して食品ロス削減に取り組んでまいります。ひきつづき皆さまのご協力をよろしくお願いいたします。』

二つ目は「てまえどり」で、すぐに食べるなら前から取ることを推進するものです。2022年の流行語大賞に選ばれたほど私たちの生活に浸透したこの言葉ですが、この誕生のきっかけは神戸市とセブン・イレブン様の対話だとお聞きしました。食品ロス問題を抱えていた企業と自治体が互いに協力し、自治体に「手前から取ることで廃棄が減る」ことを伝える役割を担ってもらうことで実現したそうです。神戸市とセブン・イレブン様との取組からはじまり、神戸市だけでなく滋賀県や京都府にまで取り組みが広がり、近畿で始まったことが全国へ普及し、大きなムーブメントにつながりました。今では国・都道府県・市町村との連携が拡大しているようです。この取り組みはコンビニ大手4社で実施、啓発活動として取り上げられていますが、「てまえどり」のポップに企業名が無いことも一つの工夫のポイントになっています。それは、他の企業にもこの運動を推進してもらいたいという思いから、会社のロゴを外して行政の名前のみ記載されているそうです。また、日常的に買い物をする大人だけをターゲットにするのではなく、ポップに親しみやすいキャラクターを使用したり、小学校の環境教育の場面にも登場したりすることで、積極的に「てまえどり」を大人に勧める子どもの姿が見られるというエピソードもお聞きしました。このように幅広い人たちを対象に取り組みを進め、その輪を広げていくことの大切さを学ぶことができました。



「てまえどり」のポップ：
自治体によって様々な種類があります！



実際にこのように掲示されていました

●取材を終えて

今回の取材では、私たちにとって身近なコンビニでこんなにも多くの環境配慮の工夫が詰め込まれていることを初めて知りました。そのような環境配慮の一つ一つの取り組みに私たちの消費行動が密接に関わっていることを考えると、環境にやさしい商品を積極的に選

択したり、ペットボトルを回収機に入れたり私たちの普段の生活の中から環境に良い行動をすることがその効果を高めるため、そのような主体性がとても重要だと感じました。また、「てまえどり」や「ボトル to ボトル」の取り組みにも見られるように、企業・行政・消費者それぞれが協働することは環境を守るための一歩として欠かせないものだと学びました。

取材日：2024年2月5日

寄稿者：2023年度WE DO KYOTO!ユースサポーター 平田

「環境に優しくモビリティと社会インフラを支える」

取材先：株式会社 GSユアサ



2024年2月1日、2023年度WE DO KYOTO!ユースサポーター4名が株式会社GSユアサに伺い、同社の環境の取組について取材してきました。今回は、2023年度WE DO KYOTO!ユースサポーターの古川さんに、取材の報告として記事を書いていただきました。（以下、寄稿者：2023年度WE DO KYOTO!ユースサポーター 古川）

2024年2月1日に株式会社GSユアサを訪問しました。GSユアサが環境に対してどんな取り組みをしているのかの説明を聞いたり、普段見ることのできないショールームや蓄電池の中身を覗いたりしました。取材当日の様子をお伝えします。

●環境への配慮がすごいGSユアサ



まずは、社員さんからGSユアサについての説明を伺いました。

GSユアサはそれぞれ100年以上の歴史を持つ日本電池とユアサコーポレーションが2004年に経営統合してできた会社です。自動車用・オートバイ用のバッテリーをはじめとして、産業用各種電池、電源システム、受変電設備などの製品があり、今後のモビリティ分野や社会インフラ分野における脱炭素化に蓄電技術で貢献していく会社です。日本のみならず、海外向けの製品も多数あります。

GSユアサの事業内容は、車用の鉛蓄電池を作るだけにとどまりません。工場の敷地に太陽光パネルを設置するなど、再エネにも力を入れているようです。なんと、工場で使われている電気は全て再生可能エネルギー由来だそうです！会社で使われる電気が100%再エネになるのはもう少し時間がかかるだろうと思っていましたが、現時点でそれを達成している企業があることには驚きました。

また、蓄電池とはあまり縁がなさそうな、生物多様性にも貢献しています。京都の在来種である、ヒオウギやフタバアオイなどを育てて、種の保存に一役買っています。

●楽しいショールーム見学

次に、ショールーム Energy Garden を見学しました。ショールームには、GSユアサがどんなことに挑戦しているのかを説明する展示があります。

まず目に飛び込んできたのは大きなジオラマ。そこにタブレットが備え付けられていました。タブレット越しにジオラマを眺めると、ロケットが飛ぶアニメーションが表示されました。これは、GSユアサが人工衛星用のリチウムイオン電池を開発するなど、宇宙に関する事業に取り組んでいるからです。他にも、事業内容を説明する動画を見ることができます。



奥にはGSユアサの事業内容がわかりやすく説明されている文章や、それに関連した製品が展示されていました。実際に手に取ることができるものもあって、蓄電池には結構重いものもありました。



●蓄電池を眺めてみよう

今度は屋外に出て、蓄電池設備を見に行きました。電力貯蔵システムである ESS の中には、リチウムイオン電池が多数入っています。蓄電池の扉を開けて、普段見ることのできない蓄電池内部の様子を見せていただきました。これがあれば停電時も安心ですね。



こちらはVOXSTARというEV充放電器です。普段の自動車の充電に使えるのはもちろん、災害時の電源としても機能します。



他にも、EVOXシステムという、VOXSTAR、リチウムイオン電池、太陽電池を組み合わせた製品を紹介していただきました。

●まとめ



蓄電池は普段の生活で深く意識することがないので、説明が理解できるか少々不安がありましたが、社員さんの話はとてもわかりやすく、実物も見ても視覚的に理解することができました。また、環境に優しい取り組みを多数行っていることもわかりました。長年京都に住んでいながらこのような企業があることは詳しく知らなかったなので、とても良い経験になりました。

取材日：2024年2月1日

寄稿者：2023年度WE DO KYOTO!ユースサポーター 古川

『環境をどう考える？』現代の若者が求められる姿勢とは。」

取材先：日新電機株式会社



2023年10月5日にけいはんなオープンイノベーションセンターで開催された「京都スマートシティエキスポ2023」にてブース出展された日新電機株式会社への取材記事です。今回は、2023年度 WE DO KYOTO!ユースサポーターの塚田さんに、取材の報告として記事を書いていただきました。

(以下、寄稿者：2023年度 WE DO KYOTO!ユースサポーター 塚田)

● 「環境について考えることは自分の豊かさを探求することだ」

上記の言葉は取材を通して最も印象的だったことだ。

今回取材に応じてくださった日新電機様をはじめ、多くの企業が環境に配慮した製品を開発している。しかし、そのようなものは「もっと良い製品を作りたい」という純粋な思いから生まれ、最終的に形として現在の脱炭素化に向けた重要なピースとなっている。環境という壮大なテーマに身構えてしまうのではなく、自分の好きなこと、実現したいこと、自分自身の心の豊かさを考えることで、環境にも容易にアプローチできることを学んだ。

● 「電気をつかさどるスペシャリスト」

日新電機様は、豊かな社会・産業基盤の実現に向けて、電気エネルギー関連の設備を中心に多くの製品やサービスを提供している。その中でも SPSS(スマート電力供給システム)は、中核製品である受変電設備や長年培った系統連系技術を駆使し、電力エネルギー活用に関する多様なニーズに応えるソリューションとして注目されている。このシステムにより、例えば工場やオフィスビルでの省エネや省コスト、二酸化炭素排出量削減、瞬低対策、BCP 対策、また離島での電力安定供給と再生可能エネルギー比率の向上、その他にも水処理場や発電所・変電所、住宅街・家庭における困りごとやニーズの解決を図ることが可能になる。

多くの方が考えているように、再生可能エネルギーは不安定な発電であるがゆえに安定供給が1つの課題である。日新電機様の SPSS は、そのような課題の克服、加えて温室効果ガスなどにも配慮した持続可能な社会の実現にも寄与するものである。

● 「新事業セグメントと環境」

日新電機様は、刻々と変化する環境に対して柔軟に対応していくために、2021年度から6つの成長戦略と3つの新事業セグメントを軸に事業展開を進めている。

【6つの成長戦略】

①環境配慮製品の拡大 ②分散型エネルギー対応 ③再生可能エネルギー対応 ④DX の製品・事業への適用 ⑤新興国環境対応需要の捕捉 ⑥EV 拡大に伴う事業拡大

【3つの新事業セグメント】

①電力・環境システム事業

各種システム提案、電力品質安定化への貢献、既設電力設備の更新の取り込み

②ビーム・プラズマ事業

イオン注入装置、電子線照射、ファインコーティング(工具や自動車部品の性能向上)

③装置部品ソリューション事業

装置部品受託生産、ASEAN 地域でのマーケットインビジネス

SDGs を中核に据えた6つの戦略と再編された新事業を軸に、社会変化に対しても持続的な成長と社会貢献へとつなげることが目指されている。

●Q&A

次に取材を通して印象に残った点を質問形式で振り返る。



千林様（右）から、開発された製品を見せてもらう

Q. 自前ではない製品もあるが、そのメリットは？

A. もちろんコストがかかってしまうが、、、。それ以上に、取引先が要求する規模やコスト、使用量に沿った製品を柔軟に提供することが可能になる。あくまでも人に寄り添った製品やサービスの提供につながっていく。

Q. 事業を進める中で、企業や世間の環境への意識に変化はあった？

A. 確実に変わってきていると思う。企業は二酸化炭素削減目標などを設定し、それに向かって事業展開を行っている。世間も同様に変わっている。

●事業展開、そして環境分野での飛躍に必要なものは…？

日新電機様の取り組みを勉強する中で、「信頼」という言葉が印象的だった。100年以上続く歴史のある企業であるが、それゆえに顧客をはじめ様々な方面での信頼関係を大切にしているように感じる。コストがかかりながらも、顧客の困りごとやニーズに応えようとする姿がそこにあらわれている。また、そのような姿勢に共鳴するように、環境に対する他企業や世間の見方も変化し始めていることを聞くことができた。

自身が過去に行った企業取材でも感じたことだが、脱炭素に取り組む姿勢は日本全体で変化しており、環境意識は少しずつ高まりつつあるようだ。もちろん、環境問題の解決などには**1人1人の小さな意識や行動の積み重ね**が必要になる。しかしながら、たとえ誰か1人がそのような環境へのアクションを起こしたとしても、大きな変化が即座に見えてくるものでは決してない。脱炭素化や環境保護、SDGsが近年注目を浴びているが、このようなテ

ーマは我々にとっては壮大なものである。それゆえ、目標に向けて単独で道を切り開いていくのではなく、**人、企業、社会**における相互関係の下で課題を解決していくことが大切であり、そのためにも日新電機様のような長い歴史における信頼関係の存在は大きいと感じる。

●最後に

取材の中では、インターンシップでやって来た大学院生のことも聞くことができた。そういった意欲的な若者世代からは前向きな気持ちや元気をもらえるらしい。我々ユースサポーターをはじめ、最近の学生は環境について学習する機会が非常に増えているが、環境分野に馴染み深い若者世代の日々の学びは決して無駄なものではなく、我々が環境に対してアクションを起こす姿はむしろ今後の脱炭素化、環境保護、SDGs 実現に向けては大きな原動力になっていくと思う。「**環境って答えがないようで実はある**」。取材に応じてくださった出野様、千林様がおっしゃった。大学生が専門分野や過去の経験などそれぞれのバックグラウンドをもとに、自分なりに考え行動する、そして**自分らしい答え**を見つけていく。その過程を大事に続けていくことで道が開いていくのではないだろうか。

取材に応じてくださった日新電機様、本当にありがとうございました。



実際の取材の様子

取材日：2023年10月5日

寄稿者：2023年度WE DO KYOTO!ユースサポーター 塚田

「日本水素社会をリーディングし、日本のエネルギー事情を改善する」

取材先：ヤマト・H2Energy Japan 株式会社



2023年10月5日にけいはんなオープンイノベーションセンターで開催された「京都スマートシティエキスポ 2023」にてブース出展されたヤマト・H2Energy Japan 株式会社への取材記事です。今回は、2023年度 WE DO KYOTO!ユースサポーターの川口さんに、取材の報告として記事を書いていただきました。

(以下、寄稿者：2023年度 WE DO KYOTO!ユースサポーター 川口)

取材先：ヤマト・H2Energy Japan 株式会社

取材日：2023年10月5日

担当者：代表取締役社長 平瀬育生 様

寄稿者：ユースサポーター 川口莉奈

ユースサポーター4名で京都スマートシティエキスポ2023に参加しました。今回は、ヤマト・H2Energy Japan 株式会社企業ブースを訪問し、平瀬社長にお話を伺います。

ヤマト・H2Energy Japan 株式会社は高圧ガス機器で70年以上の歴史と実績を持つヤマト産業株式会社の水素エネルギー関連事業のコアとなるグループ会社として設立されました。日本のエネルギーの対外依存を改善し、国内生産が可能かつ環境にやさしい水素エネルギー社会の構築により社会の発展に貢献することを理念とされています。

まずはヤマト・H2Energy Japan 株式会社様の主な取り組みについて伺います。

「主な取り組みは、大きく分けて水素ステーションと燃料電池システムの2つです。水素供給システムとしては、主に燃料電池自動車（FCV）用及びフォークリフト用パッケージ型水素ステーションを提供しています。燃料電池システムとしては、燃料電池と水素供給装置を備えた非常用電源システム、リモート地での電源システム、またはポータブル電源システムを提供しています。」

●脱炭素社会の切り札・水素ステーション

「まず水素ステーションについて説明します。再生可能エネルギーを利用した水素ステーションは、脱炭素社会の切り札と確信しております。屋根などのスペースを活用し、水素ステーション内で再生可能エネルギー（太陽光、風力など）を利用し発電します。その余剰電力などの安価な電力を利用して、水を分解し取り出した水素を…」

「そういえばみなさんは何を専攻されていますか。」

(……参加者のほとんどが文系でした。)

「…ご専攻とは少し離れているかもしれませんが…笑。」

「水を電気分解して得られた水素を高純度で貯蔵し、必要に応じてディスペンサー（水素を充填する装置）で水素を充填します。これが水素ステーション全体のしくみです。」



平瀬社長にインタビューをしている様子。左から2番目、奥が平瀬社長です。

「脱炭素社会が進むのはもちろん、各企業はガソリン・軽油代の負担を軽減することができますし、再生可能エネルギーの宝庫である日本は海外へのエネルギー依存を緩和することができます。その分のお金が投資に回ること、さらに脱炭素社会が進んでいくようになるのです。」

Q 水素ステーションを各社ごとに設置するとすると、1度の投資額がとても大きくなりそうですね。初めの第一歩のハードルが高そうな気がします。

「そこで移動式水素ステーションです。水素を出前供給することで、各社は高価な水素ステーションに投資しなくても水素を利用することができます。現在は環境省・経済産業省・京都府と連携して移動式水素ステーションの実証実験を進めています。例えば、福知山市の長田野工業団地が対象地域です。」

「また、今後市場が拡大していくにつれて価格は下がっていくでしょう。ですが、元々の価格が一企業にとってはかなり重いものなので、価格は下がったとしても複数企業の共同利用となるのが現実的かと思います。」

Q 今後、移動式水素ステーションはどのような場面・地域で活用されるのでしょうか。

「主に工業団地や港湾施設です。移動式水素ステーションを運用する際に重要なのは、どれだけ移動時間を短縮できるか、です。工業団地や港湾施設は数十社の施設が集まる地域なので、短時間の移動でたくさんのユーザーに水素を届けることができます。」

●災害時から日常まで活躍する水素燃料電池

「では次に燃料電池です。電池というと電気を貯めるという認識があるかと思いますが、電気を貯める方法は蓄電池と、もう一つの方法は何でしょう。」

水素…でしょうか。

「そう、水素です。蓄電池は充電後少しずつ電気が減っていきますが、水素は単体で分解されない、漏れ出さない限り長期間保存できます。そして必要な時に水素から発電する。これが燃料電池です。」

「こちらをご覧ください。」



平瀬社長に燃料電池の仕組みをご説明いただく様子。

左から平瀬社長、燃料電池、ユースサポーターです。

(会場に展示されている燃料電池を一同のぞきこむ。小さなスペースを活用して設置できそうなサイズ感です！)

●水素社会は目の前に！日常生活で活用される水素技術

Q 今のお話を伺っていると、まだ少し私たちの実生活とは遠いのかな？という印象を受けます。今後どのように水素社会は私たちの生活において身近な存在になっていくのでしょうか。

「主に水素自動車（燃料電池自動車）と燃料電池を利用する機会が増えるでしょう。」

「電気自動車が近距離移動に適しているのに対して、水素自動車（燃料電池自動車）は長距離、そしてトラックなど大型車での移動に適しています。燃料電池自動車なら数分程度の水素充填で京都から東京まで行くことができますよ。また燃料電池も、避難所等の非常用電源や移動車両用電源としてだけでなく、日常利用する信号機や持ち運び可能なポータブル電源において積極的な利用が進んでいます。両方とも学生の皆さんにとっても身近な技術なのではないでしょうか。」

●最後に、学生に向けて

「例えば今回のような、環境に関するイベントなどに参加してみると、本当に熱い思いを持った方がたくさんいらっしゃって、いろんなお話をすることができます。私自身、工業ガス会社に勤めていた際に水素に出会いましたが、水素は日本のためになる、だからこそ自分が日本水素社会をリーディングしたいという思いを常にモチベーションにしています。」

「みなさんのような若い世代の方も是非気軽にそのような場に参加して、見聞を広げ、自分がやりたいこと、将来を選択していきましょう。」

本日は貴重なお話ありがとうございました！！

取材日：2024年2月22日

寄稿者：2023年度WE DO KYOTO!ユースサポーター 川口